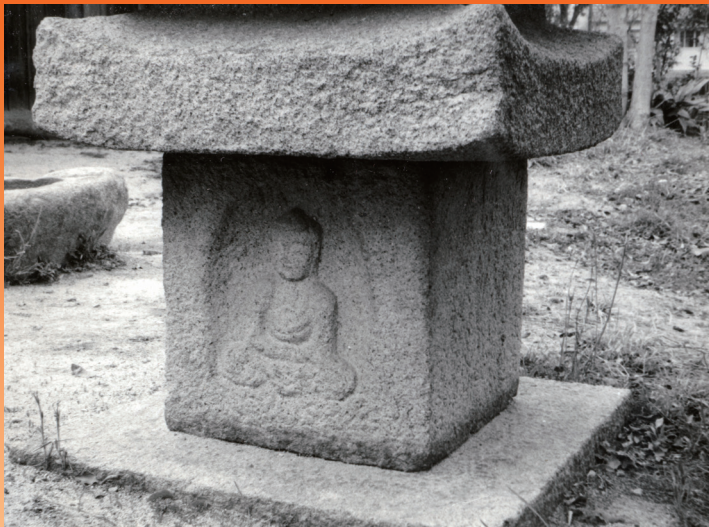


第Ⅲ部第三章

尼崎の中世

第一節〈入門編〉

『尼崎市史』にみる
尼崎の中世

西武庫須佐男神社石造十二重塔塔身

一、『尼崎市史』中世編

中世編の構成 『尼崎市史』第一巻は、鎌倉時代から信長が畿内を制圧する以前の戦国時代までを第四章「中世の尼崎」として立てています。日本史の研究では、最近発刊された『岩波講座日本歴史』などのように、中世に続く荘園制が軌道に乗り始める平安時代末期の一一世紀頃を、中世の始期とするのが一般的です。しかし、市史のように中世を鎌倉時代から始める自治体史も少なくありません。市史を含むこれらの自治体史は、時代の区切りをはっきり示すために、武家政権の成立を中世の始まりに置いたと考えられます。

一方の中世の終わりについては、これを織豊政権期に置くのが一般的です。ところが市史では、織田信長が本格的に登場する直前で中世の章を閉じています。その理由は定かではありませんが、織豊政権の戦争や政策の影響を強く受け、中世の尼崎地域のありようが大きく変わったことを意識したことによるものと推測されます（以下、「尼崎」は大物より南の狭義の尼崎を、「尼崎地域」はより広く、現在の尼崎市域とその外縁を指す語として使用します）。

以下本章では、古代にあたる市史第一巻第三章第三節を起点に、市史の中世史に関わる成果を整理したいと思います。なぜならば、この第三章第三節から、尼崎地域における荘園制の成立と展開が述べられ始めるからです。さらにいえば、古代社会のなから荘園制が生まれ、それが軌道に乗っていく歴史を史料を踏まえて綿密に検討し、地域に即して生き生きと描き出したことが、市史中世編の大きな成果といえるからです。

以下、荘園制の展開を基軸とした叙述が続く鎌倉末期までを中世前期、それ以降を中世後期として、市史の中世史に関わる成果を振り返ってみることにします。

中世前期の特色―荘園どうしの争い 市史は中世前期の尼崎地域を特徴付けるべきこととして、荘園どうしの境界をめぐる争いがしばしば起こっていたことに注目しています。日本中世史の研究の世界でも、尼崎地域の荘園領有をめぐる争いはよく知られており、多くの研究が積み重ねられてきました。そのなかでも、市史の叙述は長期にわたる尼崎地域の荘園の歴史を見通していた点で、特筆すべきものといえます。

この部分を担当したのは、当時中世社会研究をリードしていた戸田芳実氏です。氏は、尼崎の南部で荘園間の争いが起こる原因を、その立地の特色から、一貫して説明しています。その説明は、戸田氏が考えた中世社会のなりたちの見取り図であるとともに、尼崎地域の中世前期の状況を理解するための基本的な枠組みの説明でもあり、たいへん有益な成果といえます。

そこでここでは、細かい事実関係は市史を読んでいただくとして、「なぜ尼崎地域で荘園どうしの境界争いがしばしば起こったのか」という問題に、市史がどう答えたのか、その成果をまとめ直してみたいと思います。

荘園どうしの争いが起こる原因 荘園どうしの争いは、早くは九世紀、東大寺領の猪名荘と淳和院勅旨田の間に起こりました。淳和院勅旨田とは、天長七年（八三〇）に猪名荘に隣接した地域が淳和天皇の命によって開発され、退位後の天皇の所領となり、淳和天皇の皇子らによって相伝された所領のことです。

このような争いが起こる原因として、市史はまず、当時の開発の進展に注目しています。断片的に残され

た史料から、当時、堤防の築造にもなって開墾が進んだことを明らかにし、さらに、天平勝宝八年（七五八）の「猪名庄絵図」（摂津職河辺郡猪名所地図）に記された田数と、天曆四年（九五〇）の「東大寺封戸庄園並寺用帳」の田数を比較し、九〜一〇世紀初頭に猪名荘の開発が進展していたことを読み取り、新たな耕地が開発によって生み出されていることを指摘します。そして市史は、このような開発の進展が、開発候補地の帰属をめぐる荘園間の争いを引き起こしたと結論付けました。

この〈開発の進展が境界争いを引き起こす〉という考え方は、以後も荘園間の境界争いが起こる背景として、市史のなかで繰り返し述べられることになります。**荘園の開発が進む三つの条件** では、開発はどのように進展したのでしょうか。市史は開発が進む背景として、尼崎の自然地形の特性と、開発の担い手という二つの条件に注目し、次のように説明しています。

まず自然地形の特性ですが、尼崎の臨海部では、土砂の堆積によって海岸線が時代を追って次第に南へと延びていきます。これによって、新たな「浜」が形成され、平安末期〜鎌倉初期に長洲浜は長洲、杭瀬、大物、尼崎に分化して発展していきます。一方後背に残された潮入の地である「江」も、耕地として開発が進みます。このように、開発の候補地が時代とともに自然によって生み出されることで、新たな境界争いが起こるのです。

次に社会的な条件として注目されるのが、開発の担い手、主体となる尼崎における住民の成長です。たとえば、平安時代の末期には「猪名為末」と名乗る、この地域の有力住民と推定される人物が現れます。為末

は大物浜、尼崎浜の開発を行ない、同所の地主となって住民を支配するとともに、開発所領を東大寺に寄進しました。荘園の拡大を支えていたのは、このような開発の主体となる住民の成長でした。

以上、開発が進展する二つの条件をみてきましたが、さらに市史は第三の条件として、京都や奈良の荘園領主の活動にも注目しています。為末が開墾地を東大寺に寄進したように、荘園領主は住民による開発によって生み出された新たな権益を、自分たちのものにしようとした。また、荘園領主はみずから資本を投下して築堤を行なうなど、尼崎の開発に乗り出しました。

開発が進んだ結果、新たな耕地が出現するとともに、浜地の開発は宅地を生みだし、海を生業の場とする人々が多く集まりました。そこに目をつけた荘園領主は、住民たちの人身や生業の保護と引き替えに、宅地に課される税である「在家役」や漁業に対する営業税を課し、これらを収益源として確保しようとしたのです。

中世前期の叙述を貫く基本的な考え方 しかし、特定の荘園領主が尼崎を単独で支配することはできませんでした。たとえば、東大寺は住民たちの居住地に「在家地子」を賦課しましたが、住民たちの経済活動に東大寺の支配は及びませんでした。なぜなら住民たちは鴨社に対して一定の奉仕をするかわりに、経済活動の自由を保障されていたからです。住民たちはこのような支配の錯綜を利用して、鴨社と対立したときは東大寺を頼り、東大寺と対立したときは鴨社を頼るといったように、時々の状況に応じて自分たちの権益を守るうとしました。そしてこのような住民の動きは、荘園領主間の対立を激化させることになりました。

尼崎の自然地理的特性と住民の成長に支えられた開

発は、荘園領主の間に開発地の境界争いに加え、住民支配をめぐる争いをも引き起こすことになったのです。以上のような、〈開発↓新しい権益の発生↓荘園領主による権益争い〉というサイクルに〈住民の成長〉を関連させてとらえる、というのが市史の中世前期の叙述を貫く基本的な考え方であるといえます。

中世後期の特色―流通経済の活性化 鎌倉末期の悪党の登場や南北朝内乱によって、荘園領主の支配が動揺し始める時期になると、市史の叙述は、三つの点で大きく変化していきます。

第一の変化は、流通、産業の拠点としての尼崎の姿がクローズ・アップされてくることです。古代以来、尼崎は西国と京都・奈良を結ぶ重要な港でした。その後、中世後期の流通の発展にもなって、荘園領主たちが関銭や津料などの流通課税を収益源として重視し始めると、流通経済上の尼崎の地位はますます重要となっていました。

市史は、この頃より豊富に残されるようになる流通関係の史料をもとに、尼崎の活況を描いています。たとえば、南禅寺、鴨社、祇園社、箕面の勝尾寺など、京都とその周辺の大寺社修造の材木が尼崎で調達されたことや、尼崎・神崎の番匠（大工）が、南北朝内乱で焼けた石清水八幡宮の再建や勝尾寺の修造に、京都や奈良の一流工匠たちとともに参加したことを活写しています。また、割符屋や問丸など、京都の領主と西日本を結ぶ金融や運送の担い手が、尼崎に居を構えて活動していたことも、具体的な事例をあげながら説明しています。

尼崎をめぐる支配関係の転換 叙述の変化の第二は、尼崎をめぐる支配関係の描き方が大きく転換する

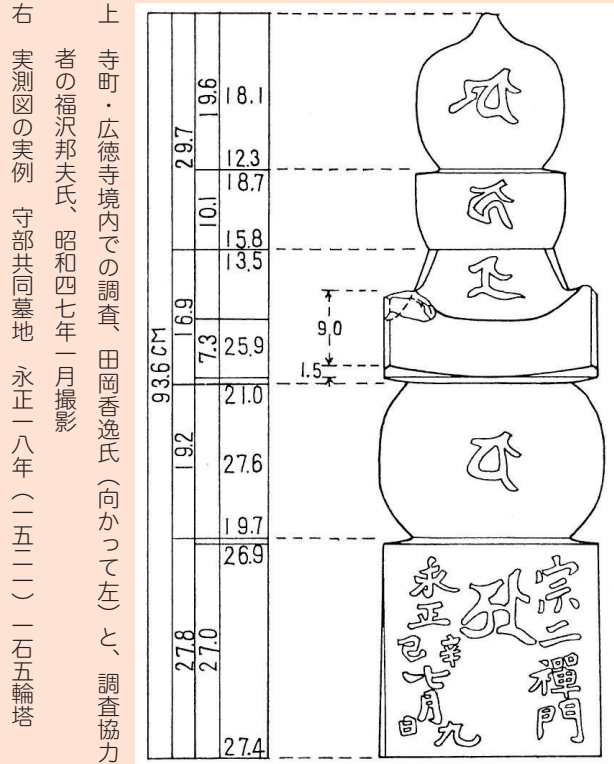
ことです。鎌倉末期の市史の叙述は悪党問題にかなりの紙幅を割いていますが、そこで示されている大きな時代の流れは、東大寺が悪党に対抗するためには、みずから悪党的な雑掌を登用せざるをえなかった、という指摘に集約することができます。

このように、次第に荘園領主が尼崎を直接支配できなくなると、中世前期の記述のひとつの柱であった荘園領主どうしの争いは、市史の叙述から姿を消していきます。それにかわって、室町幕府の守護や守護代、守護被官、地侍と荘園との関係が叙述の前面に出てきます。具体的には、荘園領主が直接的な現地支配から後退しながらも、年貢取集をはかるうとして、彼らとの間に交渉を重ねたことが描かれます。

近年、長洲荘の領主であった東大寺法華堂の院家の宝珠院に伝えられた文書が公開され、中世の後期に

至っても荘園領主東大寺が、現地の支配を委任した雑掌や代官などを通じて、地域の状況をある程度把握していたことが知られるようになります。しかし、市史の段階ではこれらの史料を使うことができませんでした。中世後期の尼崎地域の荘園支配をどう描くかは、今後に残された課題といえます。

内乱の叙述と地域史 また、中世後期には、南北朝内乱にはじまり、細川家の分裂抗争、応仁の乱など、尼崎地域を巻き込んだ戦争が繰り返されます。これらの戦争は、尼崎地域を越えた、中央政局における政治的抗争に根を持っています。戸田氏に続いてこの部分の執筆を担当されたのは、岡本静心氏です。氏は、内乱の原因となった複雑な政治的対立や戦乱の過程を、ていねいに説明されています。しかし、そのために京都や他地域の記述が多くならざるをえず、若干叙



尼崎地域における石造美術調査

『尼崎市史』第一〇巻は、市域に残る中世石造美術を紹介する第二章を設け、くわしく紹介しています。著者である田岡香逸氏なくしては、成り立ち得なかった草であったかもしれません。尼崎地域のみならず、兵庫県下の石造美術研究をほぼ独力で推し進め、比類のない業績を残した田岡氏の足跡をたどります。

石造美術調査の開始 明治三八年（一九〇五）に西宮町に生まれ、西宮史談会会員として、また兵庫県史蹟調査員として西宮地域を中心に歴史・民俗調査を進めてこられた田岡氏は、戦後、石造美術の調査研究に重点的に取り組むようになります。昭和二〇年代後半以降、西摂・淡路・播磨地域など、兵庫県域各地の石造美術や石材に関する調査成果を相次いで発表されました。自治体史への執筆も、昭和四二年（一九六七）刊行の『西宮市史』第七巻をはじめ、『伊丹市史』『尼崎市史』『川西市史』『宝塚市史』『加古川市史』『姫路市史』と広範囲に及んでいます。

田岡氏は昭和三四年頃から視力が衰え始め、『西宮市史』刊行後の昭和四五年には完全に失明されますが、研究意欲はますます盛んで、中世遺品全般を対象とする研究書『石造美術概説』（綜芸舎、一九六八）の執筆刊行に続いて西日本各地での調査を続けられ、平成四年（一九九二）に亡くなるまで成果の発表に努められました。

科学としての石造美術史 田岡氏の石造美術研究の最大の特徴は、調査結果の科学的体系化を目指したことです。石造遺品の分類、制作年代の考証にあたり、主観的な印象や部分的特徴によって推論を重ねるので

はなく、客観的な調査資料にもとづいて、宗教的背景や石材工業史との関係のなかで体系的にとらえる努力を続けました。調査資料としては、次の四つを不可欠のものとされています。①ミリ単位の実測記録、可能ならば実測図作成（前頁に田岡氏の調査による実測図掲載、②拓本、③写真、④遺品の所在や環境、構造形式や製作手法の観察結果、関係伝承などの詳細記録。視力の低下にともない、口述筆記により原稿を作成されるようになりますが、①の実測数値や④の内容はほとんど記憶し、推敲を重ねた文章を読み上げるように滔々と口述しておられました。調査や実測図作成には長年にわたって福沢邦夫氏が協力され、ご家族も調査助手や拓本・記録の整理にあたられました。

体系化への努力は、石造美術の類型分類が初の体系的著作である『石造美術概説』の二三種類から、二七年後の『姫路市史』第一五巻（一九九五、没後刊行）では四三種類に再構成されたことにも表れています。

尼崎での調査 『尼崎市史』第一〇巻第二章「尼崎の石造美術」は在銘遺品一六九基、無銘遺品四二基を採録し、慶長末年（一六一五）以前の市域の石造美術の全貌が明らかにされました。この段階での類型分類は二六種類、そのうち尼崎市域には一〇種類分布するとし、実測図・写真・拓影を豊富に掲載しています。

昭和四九年の同書刊行後も、『地域史研究』に何本もの論考を執筆され、遺品の分析・検討をさらに進めるとともに、製作・流通といった石材工業史から地域の庶民仏教史や開発史を解明できることを示されました。今後、田岡氏の提唱した「科学としての石造美術研究」をいかに継承発展させていくのか、尼崎地域のこの分野の研究にとって大きな課題が残されています。

述が拡散しすぎた観があります。

尼崎に持ち込まれる戦争が、どのような背景を持っていたのか、尼崎での合戦がどういう経過で起こったのかは、自治体史として説明されるべき問題であることはもちろんです。しかし、背景が複雑な場合、政局全体の叙述と、地域に関する叙述をどうバランスよく配置するかは、今後の自治体史叙述の課題として考えなくてはならないでしょう。

地域に史料が残され始める 叙述の変化の第三は、中世前期の叙述が荘園領主のもとに残された史料を中心に組み立てられていたのに対し、中世後期の叙述には、大覚寺、本興寺といった寺院など、地域の側に残された史料も活用されるようになることです。これらの史料は、尼崎地域の町や農村地帯の様子を考える材料として使われています。

たとえば、一五世紀はじめに日本を訪れた朝鮮使節宋希璟が、尼崎地域では三毛作が展開していることに驚きながら、一方で貧窮した人々が少なからずいることを述べた旅行記の一節と、同じ頃の生島村の農地売券に「ふけ田」（収穫量の低い湿田）が現れることをあわせて、独立性を増して成長していく層と、このような劣悪な田地を耕作せざるを得ない没落した層に、地域の人々の間で階層分解が進んでいたのではないかと、そしてその背景に経済変動と戦乱があったのではないかと、と推定しています。

かたや町場についても、尼崎町内の土地を売買した一五世紀末〜一六世紀初頭の文書から、この頃までに尼崎の町に町割りが確立し、町屋と裏の畠がセットになった屋敷が成立し、都市住民が地主と借家人に分化していたことを導き出しています。

一般的に、中世後期は都市住民の成長や一向一揆の強大化など、地域支配を進めようとする守護や大名に対抗する主体が現れてくる時期だと考えられています。市史にもそういう側面が大きく取りあげられています。特に、尼崎の一向一揆が強勢であったことには、多くの紙幅が割かれています。しかし、このような歴史の「進歩」の反面で進む、きびしい階層分解にも市史が注意を払っていることは見逃せません。中世後期の地域の人々の成長と階層分解―これらを尼崎地域に即して、どうトータルに理解するのか。中世前期の記述と比べ中世後期の記述においては、市史の筆はそこまで及んでいませんが、今後考えていくべき問題が示されていると思います。

尼崎の宗教文化―鎌倉・室町時代― 中世尼崎の宗教文化について、市史に独立した節や項は立てられていません。以下、中世編の諸節のなから、これに該当する叙述を取りあげていきます。

第四章第一節「鎌倉時代の尼崎」―「鎌倉初期の東大寺と尼崎地方の関係」では、猪名荘に東大寺の荘園経営の拠点として末寺と鎮守があったことが紹介されます。しかし、その詳細は不明であり、市史の叙述は、鎌倉後期以降の港町尼崎や住民の動向と関わるものが主体となります。その第一として、第一節三「文永・弘安期の尼崎地方」では、西大寺流律宗の開祖叡尊と時宗の開祖一遍の尼崎来訪と布教が述べられます。叡尊は当地の燈炉堂で人々に菩薩戒を授けました。また一遍については、その念仏勧進に応じて尼崎に生まれた時衆（時宗教団）にも言及しています。

内容的にも、史料の面でも、市史の宗教文化に関わる叙述の中心となるのが、叡尊・一遍の尼崎来訪に連

れて琳海上人により当地に建立された律宗寺院・大覚寺です。同寺所蔵の鎌倉末期以降の文書（市史第四巻）Ⅲ「大覚寺文書」に収録）を典拠に、諸節で敷地周辺の景観を含むその実態が明らかにされています。第四章第一節五「鎌倉末期の尼崎地方」では、まず、大覚寺縁起を読み解き、当寺は長洲住民の剣尾山（月峯寺）信仰の場であった燈炉堂の性格を継承しつつ、月峯寺の別院として建立されたと推測します。そして、こうした成り立ちを持つとともに、敷地内に市が立ち、長洲御厨の領家の寄進を受けて、燈台の機能も果たしたという燈炉堂を付属させた大覚寺が、長洲住民の公共施設としての性格を帯び、住民の自治組織から保護保障の誓約を得るに至ったことが述べられています。これにより、以後尼崎は大覚寺を核として発展していったとみられます。宗教文化とはずれますが、第四章第二節「南北朝・室町時代の尼崎」四「室町幕府支配下の尼崎地方の状態」では、大覚寺文書を用いて、屋敷地の増大や「市庭南町」「魚崎町」といった商業・漁業にちなむ町割りの確立など、同寺敷地周辺の町場発展の様子が示されています。

尼崎の宗教文化―戦国時代― 第四章第三節「戦国時代の尼崎」五「町の景観と住人」では、港町として大きく成長した尼崎町が、有力商人を含む「尼崎地下人」たちの自治組織により市場や町の運営が行なわれる自治都市となったことが述べられ、その住民たちに宗教が精神的影響を与え、社寺が実生活上も深いつながりを持ったことが指摘されています。

ここでは、当時、現在の大物・東本町・城内一帯を占めた尼崎町にあった諸宗派の寺院として、大覚寺のほか禅宗の広徳寺・栖賢寺、法華宗の本興寺・

長遠寺、浄土宗の如来院などがあげられ、方数丁の間に大寺院が林立し、町はあたかも仏教都市の景観を呈していたともいわれています。なお、大物には一向宗（浄土真宗）の西教寺・常念寺も進出していたと考えられます。そして、右にあげた諸宗派のなかでも、当時の民衆に直接的な影響を与えたのは法華宗と一向宗であり、とりわけ後者の浸透力は大きいものがありました。一向宗は、尼崎町のみならず周辺の農村にも広がり、その信徒は一向一揆を形成し、宗教文化の範疇を超えた民衆運動へと展開していきます。第三節四「戦国動乱と尼崎の民衆」では、本願寺の麾下、武士勢力に激しく抵抗した摂津の一向一揆の動向を述べるなかで、塚口御坊を中心にその一翼を担った尼崎周辺の一向一揆の組織や活動について触れています。

最後に第三節五では、尼崎地域がキリスト教の畿内最初の伝道地のひとつとなり、以後宣教の拠点となった有りが様が詳述されています。

中世尼崎の宗教文化の特徴 以上、市史の叙述を概観しました。ここから、中世尼崎の宗教文化につき、次の二点が指摘できるように思われます。ひとつは、燈炉堂の宗派的位置付けが困難ではあるものの、尼崎及び周辺地域が、西大寺流律宗や時宗に始まり、キリスト教に至るまで、いわゆる「鎌倉新仏教」以後の新しい宗派の布教の場となったことです。これは、市史では明確には述べられていませんが、港町尼崎の人やモノが活発に行き交う交通の要衝としての特質と町の発展繁栄がもたらした現象でしょう。

そしていまひとつは、尼崎が大覚寺を核として発展し、のちに諸宗派の寺院が林立する仏教都市の景観を呈したといわれるように（なお、市史では触れられて

いませんが、本興寺や長遠寺も寺内や門前に町場ができていました、町の発展と密接に関わりつつ、当地に多数の寺院が栄えたとみられることです。これは、大覚寺の例からも読み取れるように、信仰上の理由に加え、寺院が持つ経済力や公共的機能と、さまざまな政治的・経済的特権により、寺院と尼崎周辺の漁民や流通・商業者などの住民が結びついたゆえとみられます。かくして市史は、尼崎が中世の港町やその住民と、「鎌倉新仏教」を中心とした宗教の関係を考える興味深い事例たることを明らかにした、といえるでしょう。

なお、本項に紹介したような宗教文化とも関わって、その記念碑あるいは信仰の対象として当時の尼崎地域の住民により造立されたのが、笠塔婆、石塔、宝篋印塔などの石造物です。市史は第一巻第四章の各時代ごとに遺物の項目を設けてこれらを紹介するほか、市史第一〇巻文化財・民俗には第二章「尼崎の石造美術」を設け、市内のおもな石造遺品について詳述しています。加えて第一〇巻は第一章「尼崎の彫刻と絵画」及び第三章「尼崎の建築」の一「神社」において、中世から近世初頭の仏像・仏画といった仏教美術や寺社建築について解説しています。

まとめ 以上、市史の中世の記述についてふり返ってきました。中世前期においては、荘園史料を活用し、自然、開発、新たな権益の発生、地域住民の成長を基軸に描きながら、後期になると荘園史料の減少をうけて、地域支配を進める幕府、守護、守護代、地持などと地域住民の関係が主軸になっているといえます。

このような叙述の転換は、残される史料の性格が変わることにもとづくところが大きく、史料の変化はそのまま尼崎地域をめぐる諸関係が変化したことを物

語っています。興味のある個々の事実や事件について、市史をピン・ポイントでひもとくことはよくあると思いますが、ときには、市史が中世という長い時代をどうとらえているのか、少し長いスパンで叙述を追ってみるのもよいのではないでしょうか。

なお、市史の成果はこれに尽きません。この後、これを活用した『尼崎地域史事典』が刊行されます。中世の項目数は一七四項目に及び、田中文英氏、田中勇氏がその大半を執筆されています。田中文英氏はその後、『図説尼崎の歴史』中世編の基本構想にも関わり、市史の成果の継承発展に大きな役割を果たしました。

市史は決して過去の遺産ではありません。新しい視点でを読み返すことで、新しい歴史の考え方やその素材を、私たち示してくれるといえるでしょう。

Ⅱ『図説尼崎の歴史』中世編のめざしたもの

中世編の範囲と構成の特色 『尼崎市史』について述べた際にも触れたとおり、市史は鎌倉幕府の成立を中世の始まりに置いていました。ただ、なぜ鎌倉幕府の成立を中世のはじめに置くのか、中世とはどういう特色を持った時代であったかについては、特に説明がなされていませんでした。

これに対して『図説』では、中世編第一節冒頭の「この節を理解するために」において、一〇世紀以来開発や農業経営の新しい担い手が広く社会に現れ、それを支配しようとする在地領主が台頭してくることを古代から中世への移り変わりととらえることを明記し、古代とは異なる中世の時代相について説明しています。

このように中世の開幕を説明しながら、『図説』は

第一節「中世社会の形成」（平安時代後半）

第二節「中世社会の展開」（鎌倉～南北朝時代）

第三節「戦国争乱期の尼崎」（室町～戦国時代）

というように、時代順に三節を立てています。このような節の構成のバランスは、やや中世前期（南北朝期頃まで）に偏っているようにみえます。

このような構成をとったのは、それぞれの時期を平等に扱うというより、尼崎地域の歴史として独自のもので、かつ研究が進んでいるテーマを思い切って立項する方針によるものといえます。たとえば、中世前期の尼崎における荘園制や流通の問題は、尼崎の歴史として特記されるだけではなく、日本中世史研究のなかでも注目され、日本の中世における土地制度の特色や流通経済の発達の度合いを説明する事例としてしばしば取りあげられてきました。

さらに、後にも述べますが、長洲荘の領主であった東大寺の院家に伝わった宝珠院文書の公開もあり、近年尼崎の荘園をめぐる研究は急速に進みました。そうした理由で、中世前期に紙幅を割く構成になりました。

一方、中世後期についても、市史以後新たな研究が積み重ねられてきました。特に、戦国時代の城館と地域の関係についての研究は、大きく進展しました。第三節に「戦乱と城」という項が設けられたのは、そのような成果にもとづくものです。そこでは畠山城が大きく取りあげられ、発掘成果などにもとづき、地域の土豪や地侍の城郭としては同城の土塁構造が大規模であり、守護クラスの武将が一国規模の戦争の際に利用する城郭であったとの新しい見解が示されています。

さらに、旧市史では大々的に取りあげられながら、『図説』では取りあげられなかった項目もあります。

そのひとつが、尼崎におけるキリスト教の展開です。これは、尼崎に即したキシタン研究が市史以降十分に展開しておらず、適切な書き手を見出すことができなかったという事情があります。逆にいうと、市史と比較して漏れた項目は、今後の研究の展開が求められるテーマだともいえるでしょう。

自治体史に決定版はあるのか―市史と『図説』 このように考えると、自治体史には「決定版」となるようなものはありませんし、古びて参考にならない自治体史もあります。

いまひとつ、このように考える理由を示してみましよう。『図説』は研究が進展していて、かつ親しみやすいトピックから構成されているため、前から順番に読む必要はなく、興味のあるトピックから読むことができます。それは『図説』の長所ですが、一方で、時代の流れを追う中世の通史にはなっていないという限界があります。それに対して市史は、時代の流れをつかむことを重視した構成になっており、『図説』と市史は相補いあう関係にあるのです。『図説』のトピックがどのような歴史の流れのなかにあるのか、同じ時代にどのようなことが起こっているのかを知るためには、市史をひもとくのが有効な方法です。このように、自治体史は書き継がれることで成果が蓄積されていくのであり、今回のこの「新尼崎市史」のように、何年かごとに蓄積された成果と課題を整理することが必要だといえます。そして、確認された課題に取り組むために、時代にあった「新しい方法」を考えなければなりません。

『図説』『中世編の工夫』『図説』中世編の場合、「新しい方法」として、文書史料や絵巻物、遺跡や現在の

風景などのビジュアルな資料を提示し、それらの「読み方」「見方」を示し、資料の解釈や研究から具体的な歴史の記述が生まれることを示そうとしました。もちろん、市史も第四巻史料編に第一巻通史編の関連する頁数を記すなど、本文の叙述が史料にもとづいてなされていることを示していました。史料編自体は漢文史料がそのまま提示され、史料のどの部分が本文の叙述と結びつくのか、史料と叙述の関係を具体的に示すことはできませんでした。

この点を踏まえ、『図説』では史料を写真で紹介し、本文に関わる個所の①釈文（史料の字をそのまま書き写したもの）、②訓読（読み方）③解釈などを適宜示し、どのような史料のどのような記述から歴史が書かれるのかを、具体的に示そうとしました。そうすることによって、歴史の叙述は適切な史料解釈にもとづいて行なわれていることを、具体的かつ視覚的に理解してもらえるようにしました。

同時に、史料の内容だけではなく、その史料がなぜ残されたのか、史料を書き記したのはどのような人だったのかという、史料そのものに関する説明も適宜付け加えました。中世を考える史料として、どのようなものがあるのかを示すことで、中世の史料の豊かさを知ってもらい、中世の史料に関心を持つてもらえるのではないかと考えました。このような工夫は、『図説』中世編のひとつの達成であったと思います。

中世史料への誘い―新しい課題　ところで、『図説』がこのような工夫を考えたのには、市史が十分に果たせなかった本文と史料の関係を明示することのほかに、もうひとつ理由がありました。それは、昨今、近世の古文書を読もうとする意欲を持つたり、すでに十

分な読解能力を身につけた市民の方々が増えているにもかかわらず、中世文書への関心は決して高いとはいえないという事情です。

もちろん、紙幅の関係もあり、取りあげることができた史料は数点にすぎず、『図説』は中世文書を読むガイドとして十分なものではありません。また、頁数の制限のなかで紹介できる数点の史料の解説を読むだけで、中世の史料が解釈できるようにはなれないでしょう。さらに、中世の史料にはどのようなものがあるのかといったことについても、事例紹介にとどまり、包括的に述べることはできませんでした。

このような『図説』の課題を受けて、本章第二節（史料編）は構想されました。多くの市民の方が近世文書を楽しむように、中世の史料にも関心を向け、みずから読み、調べることの手助けとなるような自治体史をめざしました。

地理・地図に親しむ　『図説』中世編は、おおむね右頁が文章、左頁が写真や図表といったレイアウトになっています。このうち、左頁で重要な役割を果たしたのが地図です。たとえば、第三節2「港町・尼崎と塚口寺内町」の一三〇頁は、真ん中に塚口町の地図を置き、周辺に現況の写真、発掘現場の写真、古地図を配し、地図の該当個所とリンクさせています。第一節1「神崎川流域の発達と港津」七八頁では、開削時の神崎川の流路と明治の付け替え後の流路を示した地図、『摂津名所図会』の川船を人力で引く絵、京都から大物浦までの諸津の配置を示した広域地図が一頁のなかに配され、具体的かつ多角的に神崎川水運をイメージできるよう工夫がなされています。

このように、地図を中心にさまざまな視覚資料を配

第二巻第二号・第七巻第一号^②。

論文のなかで落合氏は、地名研究には体系的な方法がなく、好事家のすることみなされがちであり、研究者にとっては危うくて近づきたい分野である、と指摘しています。これを少し大胆にいかえるなら、地名研究は地域に生きる人ならではの、自然も含めた地理的な知識を総動員する研究であり、体系的な方法にもとづくというより、経験的に考えるものだ、といえるでしょうか。それだけに、地名研究は、地域に生きる人々が歴史を研究するときの糸口として、一層重要な意味を持っているといえるでしょう。

落合氏の研究のうち、中世に関わる指摘を一部紹介しましょう。氏は地名の特色から尼崎を三つの地域にわけて、その歴史を概観できると指摘します。東北部は為奈（猪名）をはじめとする古代氏族名に由来する地名、東南部には古代荘園猪名荘を構成する地名があるのに対し、西北部は武庫庄、時友、友行、常松常吉など荘園や名田に由来する地名が残っています。海岸部が中世になって陸地化したことを合わせると、地名から、中世に開発されたのが市域の西北部と南部であったことが浮かび上がってきます。

地理、気候の研究　このような地名研究は、土地利用のあり方の研究と重ね合わされることで、より興味深いものとなります。渡辺久雄氏の論文「長洲から尼崎まで」（第四巻第二号）は、小字の区画の形とその並び方を巨視的に眺め、市域の開発の歴史を三つにわけて概観しています。まずA「規則的な条理地形がみられる東北部は古代に開発された地域」。次にB「条理の変形がみられる中央―西北部は、開発は古いが土地が不安定な地域」。そしてC「雑多な方向性を持つ中

して歴史のイメージを豊かにしていく方法とともに、『図説』では地理的情報そのものへの関心も深まっています。そのきっかけとなったのが、序説2「尼崎市域の微地形」掲載の、筆者田中眞吾氏が作成した「尼崎市域の微地形分類図」です。この地図によって、一の州、長洲など中世の長洲荘や、尼崎の町が展開していた海岸部の微高地などがはっきりと浮かび上がってきました。近代の土地開発で改変された場所もあるでしょうが、現代の地図や景観から、さまざまな地理的情報や歴史資料を駆使して、前近代の景観を読み取る工夫の一端を示せたのも、『図説』のひとつの成果です。その成果の活用例が、『図説』刊行に先だって地域研究史料館が神戸大学文学部地域連携センターの協力を得て実施した子ども向けワークショップ「尼崎の土地の成り立ちと歴史を学ぶ」（平成一八年一〇月七日）です。この企画は、航空写真や微地形図を使いながら、子どもたちが自分の住んでいる場所や学校の立地の地理的特色を調べていくというものでした。

まとめ　初の本格的な通史である『尼崎市史』。文書史料をはじめ地図や現在の地理情報など、歴史を考えるさまざまな素材とその組み合わせによる歴史イメージの構築へ誘う『図説』。そして、市民みずからが資料を読み解き、調べるための手引きとしての本書。中世の部分だけをみても、尼崎市が刊行してきた自治体史を、このように系統立てて位置付けることができます。『図説』は、研究の成果を提示する自治体史から、さまざまな人々が地域を研究することを活性化させる自治体史へと進んでいく、転換点に位置していたといえます。

央―東南部は、古代末期から中世に開発される河川や湖沼敷、あるいは入り江や低湿地」。この分類は、落合氏の見解と重なるところが少なくありません。

このように、地名研究は地形や土地利用など、土地に刻まれた歴史と結びつけられることで、その有効性を発揮できると考えられます。さらに、「土地に刻まれた歴史」という点では、気温変化にともなう海面の上昇・下降と海辺部の開発の進展を跡付けた渡辺久雄氏の論文「尼崎付近における盛土と堤防」（第六巻第一号）も注目されます。しかし、気候や海水面の変化については、次々に新しく詳細なデータが公表され、旧来のデータが役に立たなくなる例もあります。地域史研究のため、新しい気候データの紹介や気象の歴史研究の成果を整理し、市民に広く周知していくことも、今後の『地域史研究』の課題になるでしょう。

伝承の研究　いまひとつ、『地域史研究』の成果として注目すべきは、地域の伝承研究です。論文としては酒井一氏のわずか一本（第一巻第二号掲載「摂津猪名川筋三平伝説の歴史的考察」）ですが、『地域史研究』創刊当初の熱気が伝わってきます。酒井氏が研究対象に選んだのは、猪名川から用水を取水する「三平井」にまつわる伝承です。

「天正三年（一五七五）、摂津はひどい干ばつに悩まされた。水の便の悪い塚口周辺の村々は猪名川からの取水を藩主に願い出たが、許可が下りなかった。庄屋貴志家の息子、三平は独断で猪名川から取水し、村の田んぼが潤うのを見届けて、水路の傍で自害した。地域の人々は御園に三平の供養塔を建てた」

酒井氏は、この伝承が形を整えていく過程を追うとともに、伝承の起点となった貴志家の系図にたどり着

三、市史以後の研究の発展

『地域史研究』をたどる　『尼崎市史』通史編が刊行された後、昭和四六年（一九七二）から研究紀要として『地域史研究』が刊行されています。市史の刊行後、五〇年近くの長い間、紀要が刊行され続けるのは、全国的にみてもめずらしいことです。また『地域史研究』は、単に市史を補う刊行物ではなく、時々の新しい関心にもとづいて編集されてきました。

このような事情をふまえると、『地域史研究』に掲載された中世に関する論文や記事をたどることで、中世の尼崎地域に関する研究のあゆみをふりかえることができるでしょう（『地域史研究』に載せられた中世関係論考の一覧は、本節の末尾に掲げました）。

地名研究　『地域史研究』の初期の段階で目を引くのは、地名に関する論文です。地名や伝承はもっとも身近な地域の歴史の情報です。それだけに、地名を通じて地域の歴史をどうとらえるのかは、とても大切な問題であり、史料館が刊行する紀要に載せるにふさわしいテーマであるといえます。『地域史研究』掲載の地名研究については、すでに本書第Ⅲ部第一章「尼崎の地理・地形」の第一部（入門編）において概括的に紹介していますが、ここではそれらのうち、特に中世史研究と密接に関連する成果を取りあげ解説します。

創刊当時の『地域史研究』誌上において地名研究に精力的に取り組んだのは、落合重信氏でした。氏は市立尼崎高校教諭の西本珠夫氏が雑誌『市尼史字』や『とまつ』に発表した研究を踏まえて、「地名からみた尼崎地域」と題する論文を発表しています（第一巻第三号・

き、そこに戦国大名武田氏の末裔が尼崎におちのびたという、もうひとつの伝説の影を見出します。そして、武田氏の没落を決定づけた長篠の戦いの際に、磔刑に処せられた鳥居強右衛門が、三平のモデルになったと推測します。さらに氏は伝承の背景にある事実の分析へと進み、文禄元年（一五九二）三平井組と大井組の間で起こった水争いにおいて、処刑された庄屋が英雄化されたのが三平であると指摘します。

氏の研究のおもしろさは、三平という架空の人物が、伝承や史実など地域の歴史が織りなすさまざまな作用のなかから生み出されてくる過程を追うことにあります。そして、架空の三平を通じて、逆に地域の歴史が浮き彫りにされていくことに驚かされます。このように、地域の伝承の分析は、地域の歴史を考える有効な方法であるといえます。

さらに氏は、この伝承を歴史の史料とするだけではなく、今後どう語り継いでいくのか、という点にも注意を喚起しています。論文は「三平伝説はこの地域の農民の手だけでなく、都市化のすすむなかで、この地域に住むもっと広い各階層の手にひきつがれ新しく再生されて行かなければならないだろう」とむずばれています。伝説を新しく再生する、それがどのような行為なのか、氏はくわしく説明していません。氏の論文から推測するに、伝承を架空と片付けるのではなく、それがどのように組み立てられていったか、そこに人々のどのような思いが込められていったのかを考え、語っていくことなのではないでしょうか。

まとめ　以上、地名研究と伝承研究にしばって、『地域史研究』誌上での研究の展開についてみてきました。残念ながら、このふたつのジャンルの論考は、

尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』
掲載尼崎関係中世史論文・史料等一覧

（論文）

「尼崎」という地名の起源　渡辺久雄　第一巻第一号

鎌倉時代における東大寺領長洲庄の開発

田中勇　第一巻第一号

摂津猪名川筋三平伝説の歴史的考察―地域史研究の一つの試み―　酒井一　第一巻二号

地名からみた尼崎地域　同（続）　同（続々）　落合重信　第一巻第三号・第二巻第三号・第七巻第二号

中世末・近世初期における皮多部落の土地保有―尼崎地域を中心としながら―　落合重信　第三巻第二号

中世の生島庄村落　田中勇　第三巻第三号

西摂における一向一揆の展望　岡本静心　第四巻第一号

中世都市尼崎の成立　永島福太郎　第四巻第一号

長洲から尼崎まで―土地進展の歴史地理―

渡辺久雄　第四巻第二号

尼崎の歴史と石造美術―文献史学批判―

田岡香逸　第五巻第二号

尼崎付近における盛土と堤防―低地開発の歴史地理―

渡辺久雄　第六巻第一号

尼崎地域と寺内町　脇田修　第七巻第一号

中世尼崎の絵図をめぐって―中世「敷地絵図」の歴史的性格―　奥野中彦　第八巻第二号

尼崎市の真宗寺院の開基年代

福田廣一郎　第八巻第一号

室町・戦国時代の禅宗寺院と尼崎―通玄寺領潮江荘と

近年同誌に掲載されなくなりました。その背景には、人々の関心の変化があるかもしれません。しかし地名や伝承は、地域の歴史の地層をくぐり抜け、さまざまな歴史を身にとって現在にあります。先達の仕事をもう一度検討し、新しい世代、新しい方法による「土地に刻まれた歴史」研究の今後の展開が望まれます。

最後に、最近の尼崎市域に関する中世史研究の成果を紹介しておきましょう。その第一は、戦国期の尼崎を含む畿内の政治秩序のあり方を再検討し、それが統一権力の形成に与えた影響を積極的に評価しようとする研究の流れです。かつて畿内の戦国期は戦乱が続く混乱期として理解されてきました。しかし、今谷明氏が細川氏宗家（京兆家）のもとで幕府の秩序が存続したとする「京兆専制」を提起して以来、単なる混乱期とする理解は次第に見直されるようになりました。このようななか、今谷説を批判的に継承した天野忠幸氏は、三好政権を「ブレ統一政権」とみなして、戦国期の畿内の政治秩序を統一政権の前提としてとらえる観点を打ち出しています^{（4）}。

第二は、中世の景観復元です。『地域史研究』第一―一号掲載の藤本蒼博氏「中世都市尼崎の空間構造」は、流通・交通の様相や地形環境の変化の双方から都市尼崎の諸施設の配置を再検討しています^{（5）}。

第三は、新しい中世史料の発掘と活用が進んでいることです。『地域史研究』第一―一五号掲載の大村拓生氏「室町期尼崎における材木商人に関する新史料」は、材木取引に関する新史料を紹介し、尼崎の材木商人の実力を具体的に描き出しています^{（6）}。また、天野氏と樋口健太郎氏によって、市史史料編に未収録の古代中世史料が『地域史研究』誌上に継続的に掲載さ

れています。このほか、高岸輝^{（あき）}氏による第三三巻第一号掲載の「大覚寺縁起」成立背景の研究や、天野氏と仁木宏氏監修の『本興寺文書』第一巻（清文堂出版二〇二三）など、新たな史料集の刊行も続いています。これらの新しい研究や史料の発掘を市民に公開していくメディアとして、今後も『地域史研究』の役割は重要だといえます。

〔注〕

（1）神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター「子ども向けワークショップ「尼崎の土地の成り立ちと歴史を学ぶ」（『地域史研究』第三七巻第一号、二〇七・九）

（2）のちに落合重信『地名研究のすすめ』（国書刊行会、一九八二）に収録

（3）今谷明『室町幕府解体過程の研究』（岩波書店、一九八五）、同『守護領国支配機構の研究』（法政大学出版局、一九八六）ほか

（4）天野忠幸『戦国期三好政権の研究』（清文堂出版、二〇一〇）

（5）本書第Ⅲ部第一章第三節〈実践編〉1「中世都市尼崎の景観復元」参照

（6）本章第三節〈実践編〉1コラム「史料にみえる中世―尼崎の人々と生業―」参照

（7）本章第三節〈実践編〉2「大覚寺縁起絵巻」を読み解く」参照

（執筆者）市沢 哲^{（いちざわ）}（下記以外のすべて）／森田 竜雄^{（もりた）}（「尼崎の宗教文化」中世尼崎の宗教文化の特徴）／地域研究史料館（担当　中村光夫^{（なかにみつお）}「尼崎地域における石造美術調査」）

中世都市尼崎の空間構造　藤本蒼博　第一―一―号

細川氏内衆の存在形態　古野貢　第一―一―号

三好氏と長洲荘　天野忠幸　第一―一―号

戦国期の長洲荘支配における下代益富氏

村井良介　第一―一―号

舟屋法眼元恵と法華堂・長洲荘

伊藤啓介　第一―一―号

戦国期に奈良から尼崎を旅した僧侶たちの記録

大村拓生　第一―一―号

貞治四年「野地前田田数目録」に見える人名と寺院について　小橋勇介　第一―一―号

壬生家文書所収の杭瀬庄関係文書について

樋口健太郎　第一―一―号

荒木村重の戦いと尼崎城　天野忠幸　第一―一―号

室町期尼崎における材木商人に関する新史料

大村拓生　第一―一―号

尊経閣文庫所蔵の杭瀬庄関係文書について

樋口健太郎　第一―一―号

尼崎市指定文化財寺岡家文書について

天野忠幸　第一―一―号

（史料）

『大日本地震史料』所載摂津関係記事抄

市史編修室　第四巻第一号

興福寺領浜崎荘と春日神人―鎌倉後期の春日社家日記を中心に―　田中勇　第六巻第二号

『史料総覧』所収尼崎および近辺関係記事抄（一）～（三）

地域研究史料館　第九巻第一号

尼崎市史古代・中世史料補遺（一）（二）

天野忠幸・樋口健太郎　第一―一―四・―一―五号